

平成19年度 学術フロンティア構想調書の概要

法人番号	011010	法人名	学校法人 東日本学園	大学名	北海道医療大学
------	--------	-----	------------	-----	---------

事業名	認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究 複雑系に属する認知症高齢者への直接的ケアの開発
-----	---

1. 研究目的

認知症高齢者の研究は、脳生物学的な研究などによって進展しつつあるが、人々の生活という観点にたてば、彼らのケアの方法を確立していくことは必須である。ケアは人と人の間に現象することであり、社会をバックボーンとしている。従ってケアは、経済や施策、人間の尊厳といった社会基盤状況の観点、健康な時点を含め予防から疾病期、ターミナル期という時間の観点、ケアが行われる施設や地域という場の観点、ケアにかかわる人々という人的観点からのアプローチが必要である。本研究では、こういった観点からケアをトータルに捉え、21世紀における世界の最重要課題である認知症高齢者のトータルケアを目指す。

認知症高齢者のケアは、本人・家族や地域の人々・専門職者の3者間で繰り広げられている。現在、この3者間で虐待をはじめとする新たな問題が生じ始めている。また、認知症高齢者本人への直接的ケアに関しても、嚥下機能や不可解な行動の意味やそれへの対応など、複雑な要素が絡み合っている不明な領域が多々残されている。本研究では、そのような現状を踏まえ、認知症高齢者の予防期からターミナル期までを視野におさめ、一方ではケアにかかわる本人・家族や地域の人々・専門職者間に新たに生じている問題の実態を把握し、もう一方では、複雑系に属する本人への直接的なケアの方法を開発する。最後に、認知症高齢者のトータルケアの全体図を構成することを目的とする（別紙1参照）。

2. 研究計画・研究方法

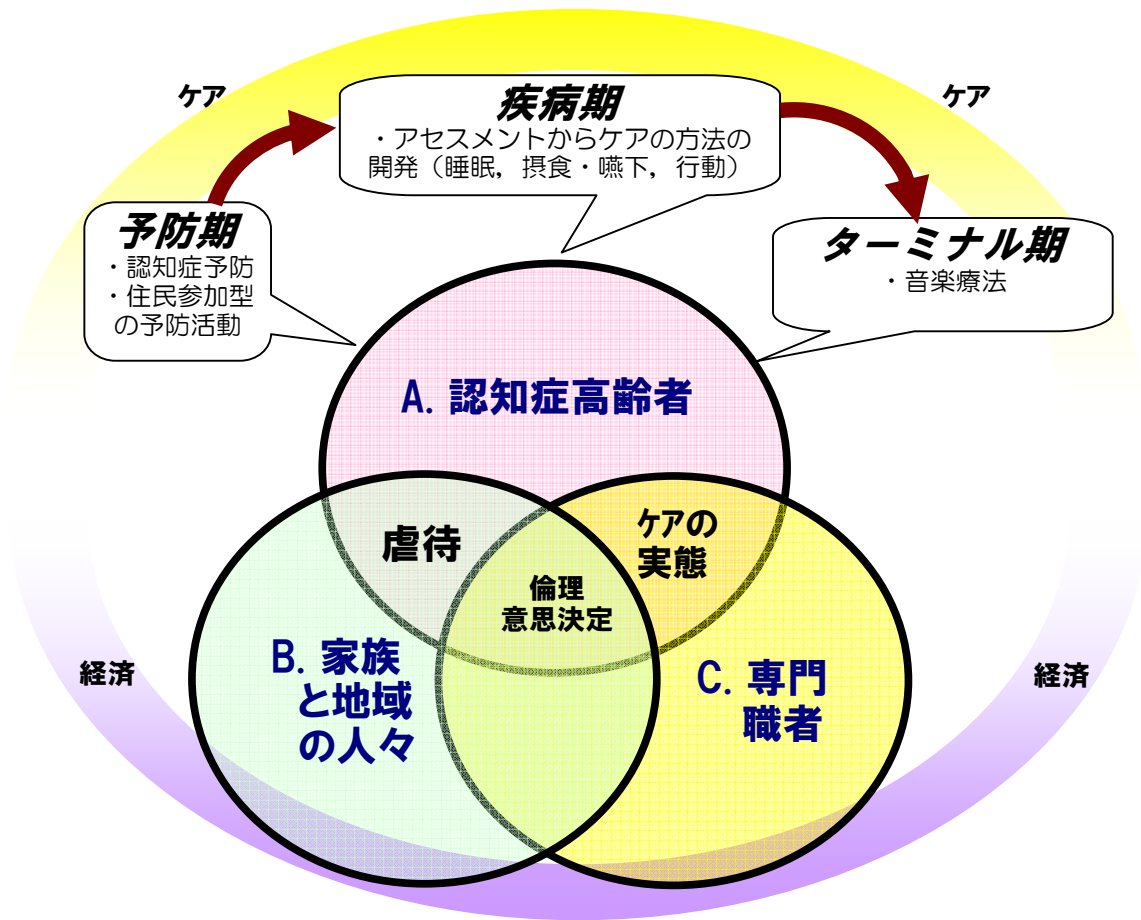
<研究プロジェクトと研究課題>研究目的に沿い、本研究は『直接的ケア開発プロジェクト』として進めて行く。このプロジェクトは、複雑系に属する認知症高齢者本人への直接的なケアの方法を開発するものである。具体的には、①地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果 ②地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価 ③認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価 ④認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発 ⑤認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究 ⑥認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割の研究からなる。この研究プロジェクトによって明らかになった事柄を、認知症高齢者に関する研究の全体図に落としとして再構成し、トータルケアの全体図を構成する。

<研究期間>5年間とする。『直接的ケア開発プロジェクト』は実践と評価を行う必要があるため、2～3年目で指標や評価の方法を抽出し、3～4年目での実践を経て、5年目の前半でケア方法の確立を目指す。5年目に最終のまとめをする。

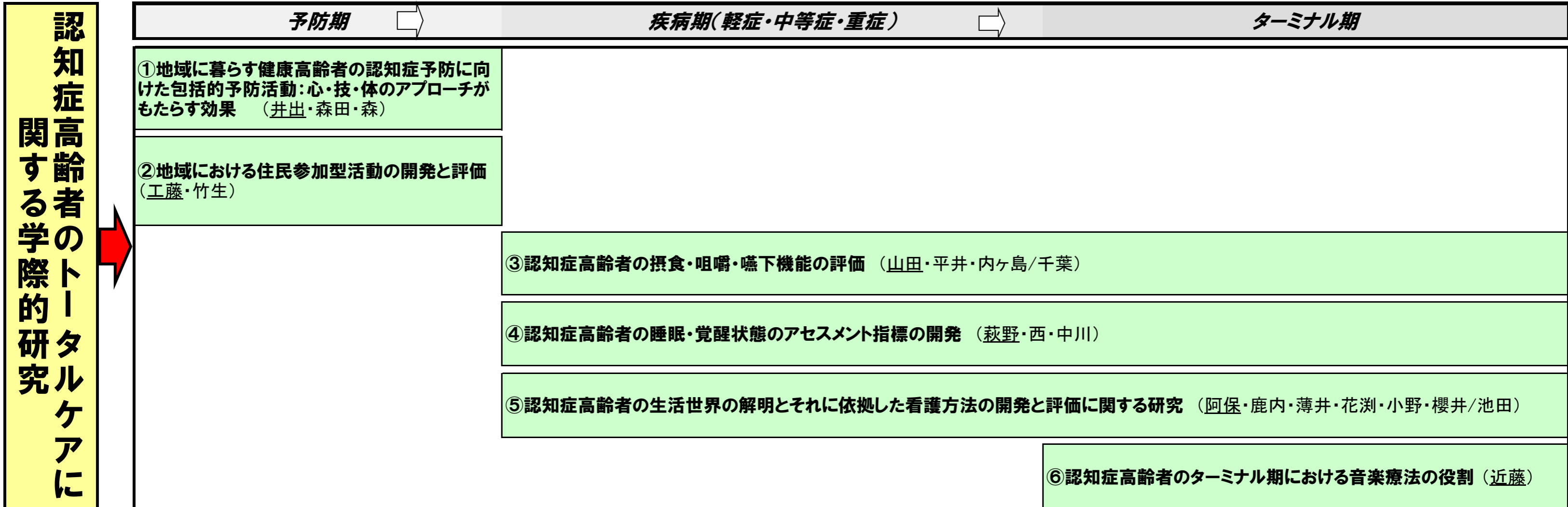
<研究方法>『直接的ケア開発プロジェクト』では、複雑系に属する直接的ケアという研究課題の特質上、調査や指標や評価方法の作成などについては量的にアプローチし、実践の評価などにおいては質的な分析方法を用いる（①②③④）。また、量的なデータ収集の不可能な研究課題⑤⑥については、もっぱら質的データ収集と質的分析方法を用いる。

※ 本紙1枚にまとめてください。

※ 一事業の中に複数のプロジェクトを設ける場合でも、本紙一枚にまとめてください。



別紙1 研究の枠組み



認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究

別紙2 研究プロジェクトと研究課題

研究プロジェクト調書

法人番号	011010	法人名	学校法人 東日本学園	大学名	北海道医療大学
プロジェクトの主体となる組織名	大学院看護福祉学研究科				
研究プロジェクト番号・名称	② 直接的ケア開発プロジェクト				
プロジェクトに参加する研究者数	12 人	研究期間	平成19年度～平成23年度		
プロジェクトの研究代表者	(職) 教授 (所属) 大学院看護福祉学研究科 (氏名) 阿保 順子				
1 研究プロジェクトの概要					
○研究分野 「ケア」					
○研究の背景となる研究領域の進展状況等 (国内外の研究動向及びその中での本プロジェクトの貢献度等について記述してください。)					
<p>認知症高齢者に関しては、多角的な研究が進められてきている。脳生物学的研究は、認知症の病態学・生化学的機序を明らかにし、それによって、その発症や進行遅延の薬物開発を可能にしつつある。また、高次脳機能学的研究は、認知症に罹患した人々に現象している諸行動の機序と脳内機能との関係を解明しつつある。しかし、現に認知症に罹患している人々の増加は、一方で彼らのケアにかかわる問題を、もう一方では認知症予防の必要性を提示している。つまり、認知症高齢者の予防から疾病期、ターミナル期という時間軸に沿った対応やケアを必要としているのである。</p> <p>認知症については、前述した諸研究による知見の増加によって、高齢者のみならず、広くすべての人々が知るところとなってきた。それによって、認知症の予防に対する人々の関心は高くなり、またケアの方法は徐々に進歩してきている。たとえば、脳機能の活性化に関する研究は認知症の予防方法として開発されてきたり、認知症による徘徊行動に対する地域ぐるみの対応なども試みられてきたりしている。また、認知症高齢者の生活機能評価方法の開発や物盗られ妄想などの精神病理学的理解とその対応方法など、多くの領域でのケア方法が開発されてきている。</p> <p>しかし、予防については、関連する日常生活という雑多な変数の存在が、とられている方法の評価を困難なものにしていたり、予防といえば高齢者自身への介入に限定されがちで、地域で暮らしているという事実がないがしろにされていたりするという現状がある。また、ケアの方法に関しては、多面的なアプローチを必要とする複雑で難しい領域、たとえば、彼らの睡眠へのアプローチや低栄養状態とも関連する摂食・嚥下状態のアセスメントやケア方法、あるいは、彼らの一見不可思議に見える会話や行動に関する理解や対応方法など、多くの解明されていない複雑系の領域を残している。さらに、ターミナル期のケアの問題は、昨今ようやく着手され始めたもののケアの方法に関する蓄積は殆どないのが現状である。いずれにしても、認知症高齢者のケアに関しては、一つの学問領域で解明するのが困難な多くの課題を残しており、トータルなケアに向けての研究を必要としている。</p> <p>したがって、本研究プロジェクトは、そういった現状を踏まえ、認知症高齢者の予防から疾病期、ターミナル期に至る具体的なケアの方法を開発することを目的としている。本研究によって、地域から各種施設におけるケア方法の修正、新しいケア方法の取り入れが可能になり、認知症高齢者のケアの改善が期待できる。</p>					
○研究内容					
<p>本研究は、予防期から疾病期、ターミナル期といった時間軸で、研究課題を大きく3つに分類することができる。</p> <p>一つ目は、予防期における研究課題である。具体的には①地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果に関する研究と、②地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価に関する研究である。</p> <p>二つ目は、疾病期における複雑系の領域に属する未解明のケアの方法に関する研究課題である。具体的には、③認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価に関する研究、④認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発、未だよく知られていない⑤認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究である。</p> <p>三つ目は、ターミナル期における研究課題であり、⑥認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割に関する研究である。</p>					

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

研究プロジェクト調書

法人番号	011010	法人名	学校法人 東日本学園	大学名	北海道医療大学
プロジェクトの主体となる組織名	大学院看護福祉学研究科				
研究プロジェクト番号・名称	② 直接的ケア開発プロジェクト				
プロジェクトに参加する研究者数	12 人	研究期間	平成19年度～平成23年度		
プロジェクトの研究代表者	(職) 教授 (所属) 大学院看護福祉学研究科 (氏名) 阿保 順子				
1 研究プロジェクトの概要					
<p>○達成目標 (3年目及び5年目までに達成すべき目標を立ててください。目標はなるべく定量的なものとし、定性的なものである場合は、その成果を検証するための評価指標をどのように設定しているかについても記載してください。(私立大学研究高度化推進委員会における中間評価及び事後評価時に、この目標の達成度について評価・検証を行います。) また、学内においてその達成度に係る自己評価・検証を行う体制がとられているかについても記載してください。)</p> <p>3年目: 予防期からターミナル期までのアセスメント指標や機能評価法の立案、ケアスキルについて実践活動を通して抽出することを目標とする。</p> <p>① 地域に暮らす健康高齢者に対する包括的な認知症予防活動(物忘れ予防教室・高齢者体力増進教室・脳トレーニング教室)の実施と効果測定を行う(井出・森田・森)。</p> <p>② 地域住民と行政、大学研究者による住民参加型の認知症予防活動の計画・評価指標を立案する(工藤)。</p> <p>③ 文献検討および実態調査をもとに、認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価指標を立案する(山田・平井)。</p> <p>④ 認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の試作と評価する(萩野)。</p> <p>⑤ ・認知症高齢者の解明されていない諸行動(特に彼らの会話、こする行動やさわる行動)の意味についての解釈と、これまでの研究で明らかになっている行動の意味に基づいた有効な看護介入の方法を見出す(阿保)。 ・地域や様々な施設で暮らす認知症高齢者の食行動の実態を明らかにする(鹿内)。 ・文献検討および会話分析の実査をもとに、認知症高齢者とケア提供者(家族を含む)の会話行動上のコンフリクト構造の仮説を構築する(薄井)。 ・国内外の人類学的研究のサーベイを行い、認知症の行動研究における方法論的課題を明らかにする(花渕)。</p> <p>⑥ 地域における実態調査をもとに、現場のニーズに沿った音楽療法プログラムを立案する(近藤)。</p> <p>5年目: 予防期からターミナル期までのケア方法の確立を目標とする。</p> <p>① 地域に暮らす健康高齢者に対する包括的な認知症予防活動(物忘れ予防教室・高齢者体力増進教室・脳トレーニング教室)の効果測定尺度を開発する(井出・森田・森)。</p> <p>② 事業の実施・評価を通して、地域における住民参加型の認知症予防活動を開発する(工藤)。</p> <p>③ 認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下評価指標を開発し、信頼性・妥当性・実用性について検討する(山田・平井)。</p> <p>④ 認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の再評価により精緻化する(萩野)。</p> <p>⑤ ・認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した有効な看護方法を明らかにする(阿保)。 ・生活の場による食行動の特性をふまえたアセスメント方法・評価基準およびケア方法を見出す(鹿内)。 ・認知症をめぐる会話行動上のコンフリクトを緩和するための社会的デザインを構築する(薄井)。 ・文化人類学の立場から認知症のケア・プログラムを作成する(花渕)。</p> <p>⑥ 認知症高齢者のターミナル期における音楽療法プログラムの効果検証と音楽療法の役割を明らかにする(近藤)。</p>					

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

研究プロジェクト調書

法人番号	011010	法人名	学校法人 東日本学園	大学名	北海道医療大学
プロジェクトの主体となる組織名	大学院看護福祉学研究科				
研究プロジェクト番号・名称	② 直接的ケア開発プロジェクト				
プロジェクトに参加する研究者数	12 人	研究期間	平成19年度～平成23年度		
プロジェクトの研究代表者	(職) 教授 (所属) 大学院看護福祉学研究科 (氏名) 阿保 順子				
1 研究プロジェクトの概要					
○共同研究の体制 (共同研究機関等との役割分担を踏まえ、共同研究の必要性について記述してください。)					
<p>本プロジェクトでは、認知症高齢者の摂食・嚥下機能の評価において、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科の千葉由美氏との共同研究体制をとる。認知症高齢者のターミナル期では嚥下障害が出現することが報告されているほか、血管性認知症など認知症の診断分類によっては早期に嚥下障害をきたす場合があり、摂食機能の評価と同時に嚥下機能評価を行うことが必要不可欠である。千葉由美氏は、高齢者の嚥下機能の評価法に関するエビデンスに基づく実践的研究を行っているほか、認知症高齢者を対象とする実践経験も豊富であることから、とくに認知症高齢者の嚥下機能の評価法の開発にあたり共同研究する必要性が高いと判断した。</p> <p>行動研究においては、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・アート&フィールドデザイン部門・教授の池田光穂氏との共同研究体制を敷いている。認知症高齢者がとる行動については、その分析ないしは解釈の方法は、彼らが生きて暮らしている生活世界の内部からの視点が必要となる。そのような視点の置き方は特に医療人類学によって提唱され、開発されてきた。したがって、行動の分析と解釈については、医療人類学者であり、民族誌を中心的な研究課題としている池田光穂氏との共同研究体制をとった。</p>					
○期待される研究成果 (社会への貢献及び学術上の意義等について記述してください。)					
<p>本研究によって、高齢者の認知症予防の方法の一端が確立され、認知症高齢者の増加に歯止めがかけられる。また、彼らの身体機能の実態や生活世界に即したケアの方法の確立によって、地域から各種施設におけるケア方法の修正、新しいケア方法の取り入れが可能になり、認知症高齢者のケアの改善が期待できる。そのことは、認知症高齢者の尊厳を奪うことなく、かつ個別な対応を可能にし、彼らの日々の生活の質を高める。また、必要なマンパワーの質と量、施設や設備に関しての再考を促すものになる。つまり、トータルケアの全体図を構成することができる。</p>					
○研究成果の公表計画					
<p>研究成果は、単年度ごとに学内での報告会を開くほか、2年目と4年目には認知症研究や関連領域の研究者たちとのパネルディスカッションを企画する。最終年度の5年目には、認知症ケア研究のオーソリティに、ケアの全体図に関しての評価を受ける。さらに、それらの報告書を冊子体にして、認知症研究にかかわる研究所や大学、関連学会等へ配布する。また、本大学ホームページにも掲載し、一般の人々からのアクセスも可能にする。</p>					

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

2 年度別の具体的研究内容

『②直接的ケアの開発プロジェクト』は、複雑系に属する認知症高齢者本人への直接的なケアの方法を開発するため、大きく6つの研究課題からなる。以下では、年度別の具体的研究内容について6つの研究課題ごとに示す。

①地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果（井出・森田・森）

包括的予防活動に関する研究は、さらに3つの研究によって構成する。研究1は「認知症の予防期における運動実践の効果に関する研究」（森田）、研究2は「脳力トレーニングによる予防活動がもたらす効果」（森）、研究3は「エンパワーメントプログラム(物忘れ予防教室)による予防活動の効果」（井出）である。

平成19年度は、認知症予防活動としての心・技・体の包括的介入プロジェクト立ち上げに向け、現在行なわれている予防活動プログラムの実態把握するため実態調査および文献検討を行い、理論的概念枠組みの構築を行なう。

②地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価（工藤）

国内外の文献検討により、地域において住民が関与する認知症予防活動の情報を把握する（工藤）。

③認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価（山田・平井）

本研究課題は、「認知症高齢者の摂食・嚥下機能の評価法の開発」（山田）と、「大型の義歯装着者（無歯顎患者、多数歯欠損患者など）に対する総合的な咀嚼能力評価法の確立」（平井）からなる。

平成19年度は、認知症高齢者の摂食・嚥下機能の評価法に関する国内外の文献検討（山田）と、アンケート表に採用する食品のテクチャーや評価方法の客観性等に関する検討（平井）を行う予定である。

④認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発（萩野）

概念枠組みを構築するために、文献研究に重点をおく。国内外における、認知症高齢者の睡眠・覚醒リズムへの介入研究の文献研究から、睡眠・覚醒リズムが改善するのに伴ってみられる生活活動における変化を抽出する。調査施設の調整を行う（萩野）。

⑤認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究（阿保・鹿内・薄井・花淵）

本研究課題では、看護学・社会学・文化人類学の立場から、認知症高齢者の行動について学際的に探求する。

- ・看護学の立場から、以下の3つの方法によって研究課題を深める。1) 意味が解明されていない諸行動、特に、彼らの会話、こする行動やさわる行動などについて、認知症専門病棟やグループホームなどでの参加観察を行う。参加観察の施設は、最初2カ所を選定する。認知症の進行レベルに従った上記の行動の変化を追う（阿保）。2) これまでの研究で明らかになっている行動の意味に基づいて、看護介入を行い、行動の変容の有無とその変容の性質を観察する（阿保）。3) 地域に暮らす認知症高齢者の食行動の実態を把握するために、文献検討を中心に行う（鹿内）。

- ・社会学の立場から、「認知症をめぐる会話行動上のコンフリクトを緩和するための社会学的デザイン」をテーマに、平成19年度は、認知症ケアにおける「会話」「コミュニケーション」の問題系を文献検討により整理し、そこに会話分析やフレーム・アナリシスなど社会学的方法論を応用する可能性を探る（薄井）。

- ・文化人類学の立場から、従来の認知症研究の再検討に基づき、認知症研究における調査の方法論的問題について取り組む（花淵）。

⑥認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割（近藤）

札幌近郊の市町村で働く音楽療法士たちを対象に、認知症高齢者のターミナル期での音楽療法活動を明らかにすると同時に、療養型医療施設や特別養護老人ホームでの音楽療法についての実態調査を行う（近藤）。

平成19年度

大学名	研究組織名
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究所

※	※
F	

2 年度別の具体的研究内容

平成 20 年度	<p>①地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果（井出・森田・森） 理論的概念枠組みに基づいた心・技・体、おのおのの介入活動プログラム（物忘れ予防教室、高齢者体力増進教室、脳トレーニング教室一名称仮）の具体的な構築を行い、包括的予防活動プログラムの立ち上げと、それぞれの活動における効果の測定を始める（井出・森田・森）。</p> <p>②地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価（工藤） 地域活動やボランティアとして高齢者に関わっている住民が、高齢者の認知症についてどのようにとらえているか、また、地域において高齢者の認知症予防のために住民の立場を活かしてできると考えている活動を明らかにする（工藤）。</p> <p>③認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価（山田・平井） わが国における認知症高齢者の摂食・嚥下機能評価における現状（評価法の工夫も含む）と課題について実態調査を行う（山田）。咀嚼能力は、義歯を装着する術者の診断能力や処置能力などによって大きく影響されるが、患者個々の口腔内状態、健康度などによってさらに大きく左右されることから、唾液分泌量や咬合力を支持する顎堤の形態、神経筋の巧緻性など患者側の因子について検討する（平井）。</p> <p>④認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発（萩野） 文献から抽出された生活活動の変化からアセスメント指標を試作する。施設の事前調査を行う（萩野）。</p> <p>⑤認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究（阿保・鹿内・薄井・花淵） ・看護学の立場から、1）平成19年度の参加観察を継続しつつ、データの解釈を行う。解釈によって、たとえば認知症のより軽度の人々の観察、あるいは在宅で生活している認知症の人などのさらなる観察が必要となることから考えられるため、新たに必要観察が可能な場所2カ所程度の選定を行う（阿保）。2）平成19年度の看護介入を継続し、行動の変容の有無と性質の観察を継続する（阿保）。3）食行動の観察基準を作成し、アセスメントの方法の検討を行う（鹿内）。 ・社会学の立場から、参与観察・録音録画分析・聞き取り・質問紙調査により、軽度から中等度の認知症患者と介護者（家族も含む）の会話行動上のコンフリクトの基本構造の仮説を構築する（薄井）。 ・文化人類学の立場から、国内外における認知症に関する人類学的研究のサーベイを行い、認知症の行動研究における分析枠組みや概念設定の問題について取り組む（花淵）。</p> <p>⑥認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割（近藤） 前年度の調査結果から、介護者、ケアスタッフ、音楽療法士からの意見を中心に、認知症高齢者のターミナル期に求められる音楽療法の役割を探求すると同時に、研究に参加する病院や施設、個人を募り、それぞれの現場のニーズに沿った音楽療法のプログラムを立案する（近藤）。</p>
平成 21 年度	<p>①地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果（井出・森田・森） 物忘れ予防教室、高齢者体力増進教室、脳トレーニング教室の実施と活動前後における効果測定を実施する（井出・森田・森）。</p> <p>②地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価（工藤） 初年度の研究結果を、高齢者の介護予防等で活動している組織・住民に提示し、住民、行政の保健福祉職、大学研究者らで、住民参加型の認知症予防活動の計画・評価指標を立案する（工藤）。</p> <p>③認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価（山田・平井） 平成19年度の文献検討および平成20年度の実態調査をもとに、認知症高齢者の摂食・嚥下機能の評価方法について検討し、評価指標を作成する（山田）。平成20年度の検討をもとに、大型の義歯装着者（無歯顎患者、多数歯欠損患者など）に対する総合的な咀嚼能力に関する評価指標を作成する（平井）。</p>

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

2 年度別の具体的研究内容

平成 21 年度	<p>④認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発（萩野） 札幌市内及び近郊の高齢者施設において、睡眠・覚醒障害をもつ認知症高齢者を対象に、生活の場の光環境介入を行う。睡眠・覚醒リズムの変化を、試作したアセスメント指標、小型活動量計測機器と行動的睡眠観察により評価する（萩野）。</p> <p>⑤認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究（阿保・鹿内・薄井・花淵） ・看護学の立場から、1）これまでの観察で得られたデータから、不明であった行動の意味を解釈する。意味に基づいて、前年度2）のように当初の観察場所での看護介入を開始する（阿保）。2）これまでの看護介入の中間評価を行い、修正が必要な場合は介入方法を変更して介入を継続する（阿保）。3）地域に暮らす認知症高齢者の食行動の実態を調査する（鹿内）。 ・社会学の立場から、認知症ケアの成功例とされる実践活動の参与観察・録音録画分析・聞き取り等を通して、認知症をめぐる会話行動上のコンフリクト構造の仮説を精緻化する（薄井）。 ・文化人類学の立場から、認知症の行動研究におけるマクロ（政治経済、法や倫理）な視点と、患者自身の経験に焦点を置くミクロな視点との接合に関する理論的問題を検討するとともに、阿保、薄井、鹿内による具体的調査データの分析に参加する（花淵）。</p> <p>⑥認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割（近藤） 前年度に立案した音楽療法のプログラムを、対象病院や施設、あるいは在宅で実施し、定期的に話し合いの場を持ちながら、現場の変化に即した柔軟な音楽療法プログラムが行われるようにする（近藤）。</p>
平成 22 年度	<p>①地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果（井出・森田・森） 物忘れ予防教室、高齢者体力増進教室、脳トレーニング教室の実施と活動前後における効果測定を進めると共に、包括的な効果測定尺度（生活活力スケール《仮》）の開発を行なう（井出・森田・森）。</p> <p>②地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価（工藤） 平成21年度に立てた住民参加型の認知症予防活動計画に基づいて、対象高齢者を募り事業を実施する（工藤）。</p> <p>③認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価（山田・平井） 平成21年度に作成した認知症高齢者の摂食・嚥下機能の評価指標について、信頼性および妥当性を検討する（山田）。平成21に作成した大型の義歯装着者（無歯顎患者、多数歯欠損患者など）に対する総合的な咀嚼能力に関する評価指標の信頼性および妥当性について検討する（平井）。</p> <p>④認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発（萩野） 前年度に行なった介入を分析し、睡眠・覚醒リズムの回復に伴う生活の変化のアセスメント指標の評価及び修正を行なう。修正を加えたアセスメント指標を用いて、再度生活の場の光環境介入を行い、アセスメント指標の評価を行う（萩野）。</p> <p>⑤認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究（阿保・鹿内・薄井・花淵） ・看護学の立場から、1）実施されている看護介入の中間評価を行い、修正が必要な場合は介入方法を変更して介入を継続する（阿保）。2）意味が明らかになっている行動への看護介入の効果を評価する（阿保）。3）グループホームや施設における食行動の実態を把握するために調査を行う（鹿内）。 ・社会学の立場から、会話行動上のコンフリクト構造の仮説から認知症施設および在宅におけるケアの実践指針を導出し、それを実際の介護場面に応用して、その有効性・妥当性を検証する（薄井）。 ・文化人類学の立場から、認知症のケア・プログラムの構築において検討すべき文化的要因に関する考察に取り組むとともに、阿保、薄井、鹿内による調査研究に共同参加する（花淵）。</p> <p>⑥認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割（近藤） 前年度に引き続き音楽療法のプログラムを、対象病院や施設、あるいは在宅で実施し、定期的に話し合いの場を持ちながら、現場の変化に即して柔軟な音楽療法プログラムが行われるようにする（近藤）。</p>

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

2 年度別の具体的研究内容

- 平成23年度
- ① 地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動：心・技・体のアプローチがもたらす効果（井出・森田・森）
研究成果のまとめと学会発表を行なうと共に、研究協力機関や協力者に対する調査研究成果の公表を行ない、更なる課題探索に向けた意見交換を行なう。また効果測定尺度開発を継続し、その信頼性と妥当性の検証を行なう（井出・森田・森）。
- ② 地域における住民参加型の認知症予防活動の開発と評価（工藤）
事業の評価を行う（工藤）。
- ③ 認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価（山田・平井）
認知症高齢者用に開発した摂食・嚥下評価指標を用いて介入評価研究を行い、臨床実践の場における有用性について検討する（山田）。大型の義歯装着者（無歯顎患者、多数歯欠損患者など）に対する総合的な咀嚼能力に関する評価指標の実用性について検討する（平井）。
- ④ 認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発（萩野）
認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の精選を行う（萩野）。
- ⑤ 認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究（阿保・鹿内・薄井・花淵）
・看護学の立場から、1）と2）のまとめを行い、認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した有効な看護方法を明らかにする（阿保）。3）生活する場（在宅・施設）による食行動の実態とその特徴から、アセスメント方法・評価基準を比較検討する。食行動における安全を保つために必要な援助方法について検討する（鹿内）。
・社会学の立場から、これまでの研究成果を総括し、「認知症をめぐる会話行動上のコンフリクトを緩和するための社会的デザイン」を構築する（薄井）。
・認知症のケア・プログラムの構築における理論的、実践的問題について整理を行うとともに、阿保、薄井、鹿内によるケア・プログラムの作成に共同参加する（花淵）。
- ⑥ 認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割（近藤）
現場で実施された音楽療法プログラムの考察を行い、認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の役割の意味を探求する。なお、研究に参加された介護者、ケアスタッフ、そして音楽療法士からインタビューからデータ収集を行い、現象学的研究に関連する研究方法を用いて考察する（近藤）。

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

3 研究プロジェクトに参加する研究者の主な研究業績（最近5ヶ年において発表した主な学術研究論文（掲載された雑誌名を必ず記載してください。ただし、口頭発表は含みません。）、学術研究著書を研究者ごとに発表年次の順に記入してください。構想調書作成上の留意事項を参照し、研究プロジェクトに関連する業績を記入してください。）

所属・職	研究者名	発表年月日	発表論文名・著書名
大学院看護福祉学 研究科看護学・助 教授	井出 訓	2004年	1)論文:(※)高齢者の日常生活場面における記憶の自己効力感測定尺度(Everyday Memory Self-efficacy Scale: EMSSES)の作成、および妥当性検証のための構成概念の分析。 井出訓・森伸幸。 <i>老年看護学</i> , 8(2), 44-53.
		2005年	2)論文: 中高年者が日常場面で意識する記憶能力減退の分析。 森伸幸・井出訓。 <i>北海道医療大学心理科学部紀要</i> , 1, 23-29.
		2006年	3)論文: 地域介護支援センターにおける介護予防事業としての、高齢者記憶トレーニング・プログラム(物忘れ予防教室)のこころみ。 井出訓・木村靖子・杉田隆介・森伸幸。 <i>北海道医療大学看護福祉学部紀要</i> .
看護福祉学部人間 基礎科学・教授	森田 勲	2002年	1)学術論文:(※)シヨベル除雪と筋力・筋パワーについて。 森田 勲・山口明彦・須田 力。 <i>雪氷</i> , 64:631-639, 2002 11.
		2003年	2)学術論文:(※)Physical factors in females related to snow shoveling power. Morita I・Yamaguchi A・Suda T. <i>Physical activity, health promotion and regional development in Northeast Eurasia</i> , Kyodo Bunkasya 62-67. 2003 9.
		2004年	3)学術論文:(※)高齢者の人力で発揮される体力要素。 森田 勲・須田 力。 <i>雪氷</i> 3: 233-244, 2004 5.
		2005年	4)学術論文: 豪雪地における高齢者のプロダクティビティと身体活動。 須田 力・浅尾秀樹・森田 勲・他。 <i>北方圏生活福祉研究所報</i> 11:61-77. 2005 12.
		2006年	5)学術論文:(※)Differences in cardio-respiratory responses to snow shoveling and shovel performance between elderly males and females. Isao MORITA・Akihiko YAMAGUCHI・Tsutomu SUDA. <i>Bulletin of Glaciological Research</i> 23:41-49. 2006 1.
		大学院看護福祉学 研究科臨床福祉・ 心理学・講師	森 伸幸
2003年	2)論文: The Effect of Memory Improving Program on Metamemory Among Japanese Elderly. S. Ide, R. Yamada, E. Hagino, N. Mori. <i>The Gerontologist</i> , 42, (Gerontological Society of America 56th Annual Scientific Meeting), 2003.		
2004年	3)論文:(※)高齢者の日常生活場面における記憶の自己効力感測定尺度(Everyday Memory Self-Efficacy Scale: EMSSES)の作成、および妥当性検証のための構成概念の分析。 井出訓・森伸幸。 <i>老年看護学会</i> , 8, 44-53.		
2005年	4)著書: うつ病に対する認知行動療法の実践。 森伸幸・岩本隆茂。「うつの臨床心理学(坂本・丹野・大野編)」, 9章, 東京大学出版会, 2005.		
2006年	5)論文:(※)中高年者が日常場面で意識する記憶能力減退の分析。 森伸幸・井出訓。 <i>北海道医療大学心理科学部研究紀要</i> , 1, 23-29. 2006.		

(※)は、レフェリー(査読)付き論文を示す。

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

3 研究プロジェクトに参加する研究者の主な研究業績（最近5ヶ年において発表した主な学術研究論文（掲載された雑誌名を必ず記載してください。ただし、口頭発表は含みません。）、学術研究著書を研究者ごとに発表年次の順に記入してください。構想調書作成上の留意事項を参照し、研究プロジェクトに関連する業績を記入してください。）

所属・職	研究者名	発表年月日	発表論文名・著書名
大学院看護福祉学 研究科看護学・助 教授	工藤 禎子	2002年	1) 論文: 農村地域における元気高齢者の主体的な健康づくり活動の促進に関する研究. <u>工藤禎子</u> ・桑原ゆみ・三国久美・森田智子・保田玲子・深山智代. 平成13年度厚生労働省老人保健事業推進費補助金(老人保健健康増進等事業分) 元気高齢者の自主的健康づくり活動支援事業報告書, 137-220, 財団法人日本公衆衛生協会, 2002 3.
		2003年	2) 論文: 閉じこもり予防事業における参加者からみた事業参加の効果と交流. 厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業、地域在宅高齢者の「閉じこもり」に関する総合的研究, 平成14年度総括・分担研究報告書(主任研究者:新開省二), 37-58, 2003 3.
		2005年	3) 原著論文:(※) 都市部における高齢者の転居後の適応と関連要因. <u>工藤禎子</u> ・三国久美・桑原ゆみ・森田智子. 日本地域看護学会誌, 8(2), 14-20, 2005.
		2006年	4) 原著論文:(※) 子どもとの同居・同居のために転居した要支援・要介護高齢者の転居したことの自己評価と転居の準備. 川添恵理子・ <u>工藤禎子</u> ・竹生礼子. 日本在宅ケア学会誌, 10(1), 39-47, 2006.
大学院看護福祉学 研究科看護学・助 教授	山田 律子	2002年	1) 論文:(※) 痴呆高齢者の摂食行動の回復に対応した環境アレンジメントによる介入研究. 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科 博士論文, Pp.1-43.
		2002年	2) 論文: 痴呆高齢者の摂食困難の評価とケアに関する研究の動向と課題. 看護研究, 35(5):407-421.
		2003年	3) 論文:(※) 痴呆高齢者の摂食困難の改善に向けた環境アレンジメントによる効果. 老年看護学, 7(2):57-69.
		2004年	4) 論文:(※) Environmental Arrangement for Enhancing Self-Feeding in the Elderly with Dementia. <i>Geriatric Nursing</i> , 25(1):150-154.
		2005年	5) 著書: 第5章3 認知症高齢者の食事のセルフケアエイジェンシーを育む. 「超リハ学—看護援助論からのアプローチ(酒井郁子編)」, 文光堂, Pp.205-215. 「ほか2件(うち査読付き0件)」
大学院歯科研究科 歯科補綴学Ⅰ・教 授	平井 敏博	2002年	1) 論文:(※) Influence of tooth-loss and concomitant masticatory alterations on cholinergic neurons in rats: immuno-histochemical and biochemical studies. Terasawa, H., <u>Hirai, T.</u> , Ninomiya, T., Ikeda, Y., Ishijima, T., Yajima, T., Hamaue, N., Nagase, Y., Kang, Y., Minami, M., <i>Neuroscience Research</i> , 43: 373-379, 2002.
		2003年	2) 論文:(※) The relationship between salivary secretion rate and masticatory efficiency. Ishijima, T., <u>Hirai, T.</u> , Koshino H., <i>Journal of Oral Rehabilitation</i> , 31: 3-6, 2003.
		2004年	3) 著書: 第1章 総論, 「無歯顎補綴治療学(細井紀雄・平井敏博編著)」, 医歯薬出版(東京), 1-44, 2004.

(※)は、レフェリー(査読)付き論文を示す。

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

3 研究プロジェクトに参加する研究者の主な研究業績（最近5ヶ年において発表した主な学術研究論文（掲載された雑誌名を必ず記載してください。ただし、口頭発表は含みません。）、学術研究著書を研究者ごとに発表年次の順に記入してください。構想調書作成上の留意事項を参照し、研究プロジェクトに関連する業績を記入してください。）

所属・職	研究者名	発表年月日	発表論文名・著書名
看護福祉学部地域 保健看護学・講師	萩野 悦子	2005年	4)論文:(※)Evaluating Method for Swallowing Function Using Trace of Tongue Movement and Swallowing Sound. Matsumi T, Koshino H, <u>Hirai T</u> , Yokoyama Y, Ikeda Y., <i>Prosthodontic Research and Practice</i> , 4:1-8, 2005.
		2006年	5)論文:(※)Quality of Life and Masticatory Function in Denture Wearers. Koshino H, <u>Hirai T</u> , Ishijima T et al. <i>Journal of Oral Rehabilitation</i> , 33: 326-329, 2006. 「ほか8件(うち査読付き7件)」
大学院看護福祉学 研究科看護学・教授	阿保 順子	2002年	1)論文:(※)長期療養施設における痴呆性高齢者の睡眠・覚醒リズムの乱れの様相と回復効果. 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士課程看護学専攻修士論文, 2002 3.
		2006年	2)論文:(※)認知症高齢者の睡眠・覚醒状態を把握するための方法の検討—睡眠・覚醒観察法とアクチグラフの比較から—. <u>萩野悦子</u> ・山田律子・井出訓. <i>北海道医療大学看護福祉学部学会誌</i> , 2(1), 35-43, 2006 3.
看護福祉学部実践 基礎看護学・助手	鹿内 あずさ	2002年	1)論文: 軽度痴呆を有する独居高齢者の食行動—昼食時の参加観察を通して—. 平成13年度北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士論文, 2002 3.
		2004年	2)論文:(※)独居生活を営む軽度痴呆老人の「食行動」—安全性を保つ観点から—. <i>北海道医療大学看護福祉学部紀要</i> 第11号, 1-11, 2004.
		2002年	1)論文: 会話的相互行為の自然な単位. <i>北海道医療大学看護福祉学部紀要</i> 第9号, 9-17P, 2002 12.
		2003年	2)翻訳書:精神科領域における救急場面の看護(Nursing Psychiatric Emergency). 阿保順子他3名による共訳, 医学書院
		2004年 2005年 2006年	3)著書:痴呆老人が創造する世界. 岩波書店 4)学術論文:アルツハイマー患者の意識世界—すべてを失って得る他者とのピュアなつながり. <i>中央公論</i> 262-269 4 5)学術論文:肥大化した自己意識からの解放—認知症の人々が教えている第二の生き方. <i>北海道高齢者問題研究会誌</i> 11-16 22 「ほか12件(うち査読付き1件)」
大学院看護福祉学 研究科・助教授	薄井 明	2002年	1)論文: 会話的相互行為の自然な単位. <i>北海道医療大学看護福祉学部紀要</i> 第9号, 9-17P, 2002 12.

(※)は、レフェリー（査読）付き論文を示す。

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

3 研究プロジェクトに参加する研究者の主な研究業績(最近5ヶ年において発表した主な学術研究論文(掲載された雑誌名を必ず記載してください。ただし、口頭発表は含みません。), 学術研究著書を研究者ごとに発表年次の順に記入してください。構想調書作成上の留意事項を参照し、研究プロジェクトに関連する業績を記入してください。)

所属・職	研究者名	発表年月日	発表論文名・著書名
大学院看護福祉学 研究科・助教授	花淵 馨也	2003年	1) 論文:(※)憑依霊の名乗りー病気経験における身体と主体 (Annunciation of the Spirit's name:Body and Agency in the Experience of illness.). 北海道医療大学看護福祉学部紀要 第10号, P25-34, 2003 12.
		2004年	2) 論文:(※)インド洋西域におけるイスラムと精霊憑依のインターコース. 科学研究費補助金(基盤研究B[1]:課題番号13571061)・研究成果報告書, 2004 6.
		2005年	3) 著書: 精霊の子供: コモロ諸島における憑依の民族誌. 春風社, 総頁数P433, 2005. 2. 24
		2006年	4) 論文:(※)現地人看護師という媒介ーコモロ諸島における帝国医療の教育と実践ー. 「地域研究: 特集 グローバル化する近代医療」地域研究コンソーシアムVol. 7 No. 2 P081-100, 2006 2.
大学院看護福祉学 研究科臨床福祉学 ・助教授	近藤 里美	2002年	1) 論文:(※)Special Moments: Attending to a Dying Person During the Music Therapy Session in the Intensive Care Unit. <i>Unpublished Master's Thesis</i> . Burnaby: BC. Simon Fraser University. 2002.
		2003年	2) 著書:「カナダの音楽療法教育とターミナルケアにおける音楽療法」. ライフプランニングセンター教育健康サービスセンター. 2003.
		2004年	3) 著書:ターミナルケアにおける音楽療法.(飯森眞喜雄、阪上正巳編「芸術療法実践講座4. 音楽療法」). p. 146-163, 岩崎学術出版社, 2004.
		2005年	4) 著書:言葉を超え、音楽を感じるとき.(緩和ケア編集委員会「緩和ケア増大特集:スピリチュアルペイン」). 15(5), 秋, p475-478, 青海社, 2005.
(共同研究機関等)			
東京医科歯科大学 大学院保健衛生学 研究科・助手	千葉 由美	2005年	1) 論文:(※)A study of screening items for hospitalized patients with dysphagia in acute hospital. <u>Yumi Chiba</u> , Yuka ohba, Haruka Tohara, Sadao Moria, masanaga Yamawaki. <i>Dysphagia</i> , 20(4):361.
		2005年	2) 論文:(※)Assessment of cortico-bulbar involvement in dysphagia: a transcranial magnetic stimulation study in amyotrophic lateral sclerosis. Masanaga Yamawaki, Akira Inaba, Haruka Tohara, <u>Yumi Chiba</u> , Hiroshi Uematsu. <i>Dysphagia</i> , 20(4):354.
		2006年	3) 論文: 脳卒中の摂食・嚥下障害へのアプローチー「食べたい」にこたえる知識と技術ー摂食・嚥下障害のアセスメント法. <i>看護技術</i> , 52(9), 16-20.
		2006年	4) 論文:ー看護師が知っておくべき摂食・嚥下機能を代償する技術ー安全な摂食・嚥下のための食物の粘性に関するエビデンス. <i>EBNuring</i> 6(3), 54-62, 東京(中山書店).
		2006年	5) 著書: 摂食・嚥下障害の実践VFガイド(植松宏監修, <u>千葉由美</u> , 山脇正永, 戸原玄編), 南江堂(東京).

(※)は、レフェリー(査読)付き論文を示す。

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	

3 研究プロジェクトに参加する研究者の主な研究業績(最近5ヶ年において発表した主な学術研究論文(掲載された雑誌名を必ず記載してください。ただし、口頭発表は含みません。), 学術研究著書を研究者ごとに発表年次の順に記入してください。構想調書作成上の留意事項を参照し, 研究プロジェクトに関連する業績を記入してください。)

所属・職	研究者名	発表年月日	発表論文名・著書名
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・アート&フィールドデザイン部門・教授	池田 光穂	2002年	1) 著書: 日常実践のエスノグラフィーー語り・コミュニティ・アイデンティティ. [共著] 田辺繁治・松田素二編, 世界思想社 (担当箇所: 第6章「外科医のユートピアー技術の修練を通してのモラルティの探究」), Pp.168-190, 2002 9.
		2003年	2) 著書: 文化人類学のフロンティア. [共著] 綾部恒雄編, ミネルヴァ書房 (担当箇所: 第7章「身体を考えるー医療人類学における身体構築と実践ー」), Pp.186-213, 2003年4月
		2004年	3) 移民・難民・人類学者ー グローバリゼーションとグアテマラ, 「トランスナショナリティ研究: 境界の生産性」Pp.115-128, 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」報告書, 大阪大学文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科, 2004 3.
		2005年	4) 著書: メイキング人類学. [共著] 太田好信・浜本満編, 世界思想社 (担当箇所: 「民族誌のメイキングとリメイキング: マーガレット・ミードがサモアで見いだしたものの行方」 Pp.113-135), 2005 3.
		2006年	5) 論文: (※)グローバルポリティクス時代におけるボランティア: 〈メタ帝国医療〉としての保健医療協力. 地域研究 第7巻第2号, Pp.169-182, 地域研究企画交流センター, 2006 2.

(※)は、レフェリー(査読)付き論文を示す。

大学名	研究組織名	※	※
北海道医療大学	大学院看護福祉学研究科	F	